二次元ぷち文庫

新居佑

表紙イラスト：Maruto!

試し読み版

SAMURAI SLAVE

サムライスレイブ 外伝

肉悦の牝犬調教

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『サムライスレイブ外伝　肉悦の牝犬調教』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『サムライスレイブ　姫武者淫辱』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

SAMURAI SLAVE
サムライスレイブ外伝
肉悦の牝犬調教
新居佑
表紙／Maruto!
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

咲夜（さくや）

一国の姫。夜な夜な武者姿に扮し、民の為に悪徳業者や怠惰な役人たちを成敗している「姫武者」でもある。

高城 伸由（たかしろ のぶよし）

咲夜の許婚。国の筆頭家老の息子。

「くぅぅ……の、伸由……今夜は何を、するつもりなのじゃ……!?」
「フッ、そのうちわかるさ。しかしまた随分と切なそうだなぁ咲夜？」
「あぁっっ……っ！　あふぅっ……だ、黙れぇっ。誰の……せいだと……くはぁぁ……っ」
強気な言葉とは裏腹に、甘く低い声が唇から漏れる。
母親を人質にとるという伸由の卑怯な策によって、屈従を余儀なくされた真紅の姫武者は、伸由と二人で、わずかな月明かりだけが照らす真夜中の山中にいた。
咲夜に流れる巫女の血は、妖夷を屠ることのできる破魔の力であると同時に、ひとたび化け物の淫毒を浴びれば、加速度的に性感が高まっていく諸刃の剣だ。
すでに幾度も淫触手に犯され、汚しつくされた黒髪の少女の身体は、いくら強がろうと、プライドの高い姫武者に身を斬られるほどの屈辱を刻み込めるほどにまで淫らに、そして艶やかな肢体へと変化していっている。
今させられている格好も屈辱的だ。隣国に響いた美しい相貌には、黒い目隠しが巻かれ、両手を後ろ手に縛られている。まるで罪人のように自由を奪われ、憎き男の手に引かれるまま、真夜中の山道を歩かされている。
そして貪淫に変わっていく姫武者の肉体をさらに悩ませているのが、身につけさせられている真紅の鎧だ。
つい数日前までは、長大な刀を用いて悪を斬る勇壮な女武者のシンボルであった赤い鎧

えっちシーン試読み ここからスタート!

は伸由によって作り直され、主人の身体を守るどころか、これでもかというほど淫靡に白い肌を露出させている。

はち切れんばかりに溢れた双乳は、わずかに先端の赤い突起を縦の皮筋で押さえつけられているだけで、限界まで短く切り詰められた袴の奥で赤く充血した少女の秘弁が、細長い黒皮の帯に巻かれているのがありありと覗けてしまっている。

しかも鎧自体のサイズも一回り、いや二回り以上も小さく設定されており、ムチムチに溢れる柔らかい女肉が、ギチギチと音を立てているかのようにきつく締めつけられている。

当代一とも噂された精悍な立ち姿は、赤い卑猥鎧に彩られて、今では男を誘う猥褻な情婦にしか見えないでいた。

（あ、ああっっ！　またこんな格好……っ。はぐっ、か……感じ、る……っ！　股が擦れ、身体中が締めつけられて……んはぁぁぁっ！）

武士の誇りとも言える鎧を、こんな破廉恥なものに改造され、そして触手の化け物はおろか、守るべき民たちにまで犯されたのは、つい昨晩のことだ。

この責め鎧を着せられているかぎり、受けた悔しさから永遠に逃れることはできない。それにこの鎧は、ただでさえ敏感になっている性感帯をきつく締めつけいじめ抜く卑猥な淫拘束具でもある。

冬ではないといえ、山の空気は冷たい。なのに咲夜の身体は全身が内側から熱せられて

いるかのように火照ってたまらない。特に股間と胸の突起は今にも蕩け落ちそうなくらいに発熱している。

「ほら、着いたぞ咲夜……おい、咲夜？　ははっ」

足を止めた伸由が、突っ立ったまま腰をモジモジとさせている少女にニヤけた笑みを送った。

「はぁ……はぁ……くぅっ、わ……わかっておる。着いたの……あ、おぉぉぉっっ……っっ」

目隠しと拘束を解かれた赤い姫武者の身体は、全身から噴出したじっとりとした汗で蒸れており、無意識のうちにキュッと締まった艶かしい両太腿の間からは、半透明な粘液がジワリと滲みだしているのがわかる。

黒髪が腰まで垂れた背筋は、ピクピクと微弱な振動に揺れ、ピンピンに張り詰めた両の乳房はすぐにでももぎ取れそうなくらい甘く熟した果実のようだ。

（こんな……歩いた、だけで……足腰が……痺れて……。た、立っているのが辛……いぃぃ、など、と……ぉぉ。）

震えながらやっとの思いで足をつけた地面に、思わずへたり込みそうになってしまう。自由になった両手で腰に佩いた長刀を杖代わりにし、どうにか立っているという状態だ。

「俺様の用意させた鎧は気に入ってくれているようだな。いい感じに蕩けているみたいじゃないか」

思わず四つんばいのまま、キュンと背筋を仰け反らせ、お尻を思いきり空へと突き上げてしまう。

全身からさらなる発汗が促され、股間の秘奥がグツグツと熱鍋で煮えられているように燃え滾ってくる。

「お、おほぉぉっっ！　く、ぉぉぉおっっ！　の、伸由……お、お前たち……なにを……ひぐぅぅっっ！　いったい何をしたのじゃ……おひぃぃぃいっっ！」

圧倒的な官能の嵐が、赤い露出鎧に身を包んだ咲夜の中を駆け巡る。

熟しに熟された果実を、さらに燃え蕩かせるような熱いなにかが、身体の中に直接注ぎ込まれているような気がした。

突き上げたお尻から伸びる艶かしい太腿がクイクイと卑猥な開閉を繰り返し、両手で突っ張っていた上半身が、今では快感に堪えかねて両肘で身体を支えている。

牝犬の尻尾のようにピクピクと左右に振られる丸出しの桃尻に合わせて、ぶら下がる二つの肉果実が、ビンっと張り詰めたままブルブルと甘い痺れを享受している。

「ほほっ、伸由様。この娘、また随分と妖夷の媚毒をぶちまけられたようですなぁ」

「ぶちまけられたなんてもんじゃねぇよ。あの化け物どもに後ろの穴からなにから散々突き込まれた上に、卵まで産みつけられたんだからなぁ。そりゃあ、くるだろうさ」

今にも発狂しそうなくらい悶えている咲夜を、男たちはまるで勢い余って壊れた玩具の

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

ように評している。

「くほおぉぉぉっっっうぅっ！　お、おお……ふぉぉぉっっ！」

「教えてやるよ、姫武者さま。その首輪は妖夷と同じものでな。奴らの媚毒に反応して、女をさらに発情させるのさ。くく、牝犬への儀式とでも思ってもらえばいい。完全に吸着すれば、お前はいつでも牝犬でいられるってわけだ、ははははっ」

笑う男の言葉を聞いて、少女の理性が戦慄する。

ただでさえ過敏になっている性感帯だというのに、これ以上情欲に満たされてしまえば、いったいどうなるというのか？

文字通り発情期の牝犬のように、抑えられない官能をところかまわず発散し、色狂いの情婦のように淫らな感覚に溺れてしまうかもしれない。

（な、ならぬ……そのような無様な……わたしは……ひぃぉぉぅううっっっ！）

強い決意を滲ませて、なんとか暴走する牝本能に抵抗しようとした。けれど少女の清廉な想いなど、荒れ狂う快楽奔流は、まるで羽蟲のざわめきのように寄せつけず、情けなく地面に突っ伏した真紅の姫武者の肉体を徹底的に弄ぶ。

「あぐぁっっ！　くふぅぉぉっっ！　お……あ、あああああっっ！」

ただでさえ露出鎧にきつく締めつけられた肢体がビチビチという淫らな音を撒き散らしながら、たまらない官能に踊り狂う。

なにを突き込まれたわけでもない。とにかく身体中が熱くて、切なくてたまらない。まるで意地の悪い焦らし責めを受けているような感覚が、気高い姫君の誇りを余計淫らにいじめ抜く。

「ひぐ……たま、らないぃぃっっ！　あ、ぁぁああっっ！　んふ、ふんんんっっ！」

（あぁ、や……いやなのに……我慢できないっっ！　ああ、刺激がほし……か、感じさせて……イカせてぇぇっっっ！）

咲夜がまだ生娘であったなら、お腹の奥底から突き上げてくるようなたまらない衝動を受け流すこともできたかもしれない。だが彼女は肉の悦びを覚えている。身体に、理性の一欠片にすら染みついてしまっている。

流せるわけがない。放っておけるわけがない。この熱くジュクジュクと煮え滾るような情動を我慢できるほど、根付いた牝の欲求は浅くはなかった。

「見てみなされ。まだ何もしておらぬというのに、すごい乱れようじゃ」

「くっく、これは先が楽しみですのう」

「ひぎぃぃぃぃっっ！　あ、あぁ……見るでない……見ては……んんっ、見てはならぬぅぅっっ！　お、おほぉぉおおおっっ！」

まるで立ったまま前屈でもしているかのように、咲夜のお尻は暗闇の夜空に向かって高々と突き上げられていた。その格好はまるで情欲に狂った牝犬が、必死に快感を求めて

いるように見える。
　股間にめり込んだTバック状の帯をパックリと呑み込んだ陰唇からは、ヌルヌルした半透明な液体が、ブルブル震える太腿を垂れ落ちて、女武者の足元に小さな粘ついた水溜まりを形成している。
　いやらしいさまは下半身だけではない。足りない刺激を補うために少女の本能が選択したのは、実った二つの果実を弄りぬくことだった。
「んちゅぱっ……ぐじゅぐじゅ……ふむりゅ……ちゅるちゅる……っっ」
　両肘で固定した乳房を、自分の唇で弄ぶ。きつい帯に押しつけられた完全勃起の淫乳首が、柔らかい唇の中で、グチュグチュといやらしい音を響かせながらコロコロと転がっている。
（かふぁぁぁっっっっ！　ひぐぅぅぅっっ！　イ、イイッッ！　地面のザラザラぁぁっっ！　胸が擦れて気持ちイイのぉぉぉっっ！）
　プニプニと弾力のある肉脂肪にザラついた地面がたまらなく合う。高まりきった肉欲は、救国の剣士の名を欲しいままにした姫武者に、淫らな自慰行為を要求する。
「くくく、いいざまだな姫武者。牝犬になれとはいったが、誰もそこまでは命令してはいないぞ？　それとも本心で実は望んでいたのか？　ははっ」
「くっ、ひぐ……っ！　だ、黙れぇっっ！　こ、これは……身体が、この……首輪が……

っ！　んひぃぉぉぉおっっ！　お前のせい……あひぃぃぃぃぃっっっ！」

少女の身体が飛び上がる池の鯉のようにビクンッッと大きく跳ねた。美麗な顔は淫らなアへ顔に変わり、本当の犬のように舌を唇から垂らして悶え叫んでいる。

お尻を高く掲げて、地面にズリズリと身体を寄せているさまは、まさに牝犬そのものといえた。

（だめ……らめ、らぁぁっっ！　身体が熱くて……制止が、きか……らひぃぃっっ！　胸ぇぇっっ！　んちゅぱっっ、ちゅぶる……痺れへ……ぉぉおおっっ！　燃へるっっ！　お、おかひくなふぅぅぅっっ！）

キュッとくびれたウエストをグネグネと動かしながら、全身に流れていく快感電流を貪っていく。柔らかな果肉の実から発するおかしくなるような痺れを、四つんばいになった全身で感じ、悶えて叫ぶ。

「んん～、早速イキそうですぞ。あんなに気持ちよさそうな顔をして……」

「やはり牝犬の素養がたっぷりですなぁ。ここは派手に達してもらいましょうか」

口々に勝手なことを言う男たちの言葉に反論しようという気力さえ、今の咲夜は持ち合わせていなかった。

淫毒に蝕まれた肉体と理性が膝をガクガクと震わせて、鍛え上げた筋肉をただの柔らかな媚肉へと変えていく。唇の端からは涎とともに、誰が聞いても発情した牝のものだとわ

かる喘ぎ声が零れ出ている。

（あ、ああ……こんなところ……こんな連中に馬鹿にされて……見られて……で、でも、これぇぇっっっ！　頭蕩ける……っっ！　胸が、爆発するぅぅっっ！）

喜悦の高波が誇り高い姫武者の理性を呑み込んでいく。沸々と湧き上がる泡の雫のように、全身に浸透した快楽の種が鼓動の高鳴りとともに、一斉に発芽する。

（らめ、らめ……もうらめ……っっ！　イキ、たく……あんぉぉおおっっっ！）

伸びきった背筋が、もう一段も二段も上の高みへと衝き上がる。形のよい丸いお尻がブルンッと震え、仰け反った細い顎が屈服の淫語を撒き散らす。

「はおおおおっっっっ！　イ、イクッッッ！　くほぉぉっっ！　わらひ、イクッッッ！　んあああっっっ！　イってしまふぅぅぅっっっ！」

ブシュルッッッ！　と股間から粘ついた愛蜜がぶちまけられ、咲夜のお尻の頂点から頭の先までが快楽の桃色に染められる。

「んほぉぉぉおおっっっ！　おおっっ！　イックッッ！　イグゥゥゥッッ！　あ、ああっっ、恥ずかしいのに……んああっっ、悔しいのにぃぃっっっ！　あひぃおっっ、イグゥゥゥウウウッッッ！」

唇から絶頂を知らせながら、高々と突き上げた太腿が狂ったようにガクガクと揺れる。お尻が前後にグングンと振りたくられ、イッてもイッても降りられない絶頂淫獄の果てま

「ああ、そうだな。これほどの淫売では民が愛想を尽かすのも時間の問題かもしれんなぁ。ははは っ」

馬鹿にされている。見下されている。挙句に民たちのことも引きあいに出されて、罵倒される。なのに、悔しさは空瓶の底に残された一滴ほども湧いてこず、代わりに、熱く滾る情動が掘り当てたばかりの温泉のように、後から後から噴き出して、ネットリとした汗で蒸れた女体を蝕んでいく。

「まぁ、主として、飼い犬の面倒くらいはみないといかんか。お前らっ！」

『かしこまりました』

言った伸由の合図とともに、中年侍たちが一斉に自らの袴を脱ぎ去った。そこに現れたのは、カチカチに固まり、先端が半透明な液体に濡れている勃起淫棒だ。

「はぁうっっ！　く、ぁぁあっっっっ！」

それを見た瞬間、膣奥がジュクンッと鳴ったのを確かに感じた。捜し求めていた母親と再会したときとはまったく異なる肉の感動だ。

「どうだ、こいつらの醜いチンポが欲しいだろう？　疼いているはずだよなぁ？　ええ、牝犬武者よぉ？」

伸由のネチネチとした声が、耳の鼓膜を通り越して、脳内にまで響いてくる。

そうだ。まったくその通りだ。白く汚れた赤い鎧に包まれた咲夜の身体は、目の前に並

そこ飛ばし読み ページから！ ネタバレ！

べられた男たちの肉棒が欲しくて欲しくてたまらなかった。
次から次へと薪をくべられ、煮え滾ったお湯をじっくりとかき混ぜられるみたいに、女の中心がジュンジュンッと啼いている。
固くしこった乳首は、いつ無茶苦茶に弾かれ揉まれるのかと待ちわびている。
「こいつらのモノが欲しかったら、ここで小便を垂れてもらおうか？　ふふ、もちろん牝犬は犬らしく、それ相応の格好でな。どうだ？　ははは っ」
「そ、そんな……くぅっ……っっ」
思わず顔が赤らんだ。まだわずかに残っている乙女としての恥じらいが、屈辱的な行為にためらいを覚えさせる。
いくら命令だとは言っても、そんなはしたないことができるはずがない。穢れを知らない姫として育ち、これまでどれだけの恥辱を舐めてきていても、他人の前で放尿するなど、考えられない屈辱だ。
「さぁ、どうだ？　こいつらももう限界だからな。お前など放っておいて、自分で抜いてしまうかもしれんぞ。なぁ？」
「ええ、まったく。おかずには困りませんからなぁ、ふぁふぁ」
腹の出っ張った男たちが、裸より数倍もエロティックな咲夜の犬姿を見ながら、自らの股間に手を伸ばし、猛った剛直をシュシュッッと擦りたて始めた。男根はビクンッとわな

なき、見るからに充血の度合いを高めていく。
「くぁぁっっ、んんんっっ」
胸の内で、身体のすべてで姫武者の誇りと牝の本能が衝突し、弾けあう。
咲夜の瞳は、まるでお預けを食らった犬のように、じっと男たちの肉棒を見つめていた。唇の端からはトロリとした涎がひっきりなしに垂れ落ちて、ハの字に折れた眉根とトロンと蕩け落ちた双眸が織り成す表情は、まさに牝犬そのものだ。
男たちがシュシュッッと扱き上げる勃起の香りが、極上の料理にかかるスパイスに思える。
今を逃せば、どうしようもない肉の疼きを永遠に抱え込まなければならないのかと思うたび、無意識のうちに、身体をくねらせて、色っぽい女豹のポーズでアピールしてしまう。
(し、しかし……わたしは姫……肉欲にこれ以上溺れるわけには……ぉぉっ、でも、この疼きは……こんな、どうしようも……ぉぉぉっっ!)
瞳にはすでに涙さえ浮かんでいた。身体は完全に快楽に染まりきり、腰が前後に激しく空腰を打っている。
こんな状態で街中にでも放置されれば、あっという間に男たちの嬲りものにされてしまうことは間違いない淫猥さだ。
それでもこの一線だけは譲ってはならないと、理性が必死に呼びかける。

「どうしたのですかな？　早くしないとイッてしまいますぞ？　なにせ我々は仲由様のように若くはないですからなぁ」

中年侍の一人が嘲るように言う。

正体を知らないとはいえ、彼らは咲夜を支える家臣たちだ。そんな男たちの前でこれ以上の恥を晒せば、姫としての尊厳を完全に失うことになってしまうかもしれない。けれど――！

「くぁぁぅぅっっ、ひぎっ、くほぉぉぉおおっっ！」

咲夜は、苦悩と官能に満ちた声を響かせた。

男たちの肉棒の先端からは、すでに大量の透明粘液が溢れ出しており、ブクンッと膨らんだ陰茎の充血具合は、もういつ射精されてもおかしくないように見えた。

（おぉぉっ、イキ、たいぃっっ！　穴に突き込んでほしいっっっ！　くあぁぁぉぉぉおっっ、じゃが、わたしはぁぁぁっっっ！）

姫として、国と民を守る女武者として、快楽にこれ以上染まるわけにはいかない。強くありたいと思う。だから負けるわけにはいかないと、そう咲夜が決心した瞬間――。

「ふん、まったく強情な奴だ。悩まなくとも、すでにお前は牝なんだよ！」

「んひっっ⁉　ひぎぃぃいいっっっ⁉　んああっっ、おぉぉおおっっ！」

突然、咲夜のお尻がビククンッッと跳ね上がった。これまで必死に堪えていた快楽の渦

が、真紅の姫武者を再び困惑させる。
「お腹……膣内でなにか動いて……っっっ!? ぉぉおおっっ！ くほぉぅっ！ やめ、らめっっっ！ ひぎぃおおおおっっっ！」
今までの燃え盛る感じとはまるで別物の、身体の内側から溶かされるような悦楽が、気丈な姫武者を蹂躙する。
四つんばいのまま突き出されたお尻の間に、赤い股帯がきつく食い込んで、たまらなく卑猥な情景を作り出す。
「くくく、蟲を産みつけられたのは覚えているだろう？ そいつらは貪欲でなぁ。宿主の禁欲を決して許しはしないのさ。精液を受け入れるまで、主を徹底的に生殺しにする。さぁて、どうする？ イケないんだろう？ 疼きまくってるんだろう？ 今ならまだ精液はあるんだぜ、姫武者？」
「はぁぐっっっ！ ほぉぉぉぅううっっっ！ ひぎっ、かふぉっっ、らめ、こんら……溶けるっっっ！ わらひが蕩けるぅぅぅうううっっっ！」
限界まで我慢を続けていた女体にとって、膣内からの激烈な淫撃は到底凌ぎきれるものではなかった。
決して満足させず、自ら精を欲しがるように仕向ける淫獣は、咲夜の欲求を高めるだけ高めて、それをどこまでも維持し続ける。

身体が燃えているように感じられる。全身の性感帯がジンジンと張り詰めて、もう淫らなことしか考えられない。

（わたしは……姫……なのに……民たちを母上を……ひぁぐぅぅうううっっっ！）

瞳に映った男たちの肉棒が欲しくてたまらなかった。全身から発汗し、陰唇は完全に開ききり、早くこの切なさを埋めて欲しくて、ブチュブチュとネットリとした牝蜜を撒き散らしている。

「おおっっ！　おおおっっっっっ！」

侍たちが驚きと歓喜の声を上げた。男たちの目の前で、赤い鎧に包まれて悶絶する姫武者のムチムチした左足が、高々と宙に持ち上げられたのだ。

（ああっ、家臣たちにみ、見られ……恥ずかしい……じゃ、じゃが……も、もう我慢が……わたしは、満たされたいっっ！）

ジョロ……チョロチョロォォ……ッッ。

屈辱以外の何ものでもない。けれどそんなことは最早どうでもよかった。震える内腿を伝う生暖かい感触が悔しく、そして気持ちよくてたまらなかった。

本物の犬にも勝る美しい軌跡を描きながら放出された金の飛沫は、姫に残されたプライドを完全に洗い流し、そして一匹の牝犬へと堕落させた。

「はぁ……ぁぁっっ！　ぁ、ぁぁぁっっ……お、お願いします……ふしだらな牝犬に、あ

なた様方の逞しいチンポを……は、あぁぁ、グチョグチョのマ〇コに……い、入れて……ぶち込んでくださいっっ！　ああっっ、お願いします……早く、早くぅぅっっっ！」

長い黒髪が大きく揺られ、快楽に堕ちた姫武者の懇願の叫びが、夜の山小屋に響く。

「言われずともじゃ……っっ！　さぁ、皆！　我らに逆らったこの牝犬の穴という穴にぶち込んでやろうではないか！」

「おうさっ！　ふふ、若い牝の肉壷を、じっくりと堪能させてもらおうかのう！」

いきり立った男たちの勃起肉棒が、黒い情欲に敗北した牝武者のビンビンに張り詰めた女体に向けられた。

（はぁぁっっっ！　くるっっ！　くるぅぅっっ！　おぉぉっっ！　早くなんとかしてぇぇっっっ！）

ブンブンと振りたくられるお尻を一人の男がガシッと押さえる。他の男は腹の下に回り、そしてもう一人はトロンと蕩けた美貌の前に位置する。

「それでは一斉にいくぞっっ！　そりゃぁぁぁあっっっ！」

ジュブチュォォッッッ！　ヌブチュッッ、ズブチュォォォオッッ！

「ふぐぉぉおおおおっっっっ！　ふじゅふぉぉおっっ！　ひぃっっぎっっっ！　ひぐっっっっ！　ひっひゃふっっっ！　ひぐっっっ！　ひぐっっっ！　、ひっぐぉほおおおおおっっっ！」

突き込まれた肉棒が、熱く滾った膣内、肛門、そして口内を抉り抜く。同時に、堕ちた牝武者の肉欲は、老獪な侍たちの剛直を、最大感度で徹底的に扱き抜いた。

「いいっっっ！　いひぃいっっっ！　んじゅるぐちゅっっ！　ふじゅるぷっっっ！　ぉぉおおっっっ！　イグゥッッッ！　わらひ、イギまぐるぅぅぅっっっ！　あぁぉおおっっ、もっと突いて、もっと嬲ってぇぇっっっ！　おほぉぉぉおおっっ！」

腰がグングンとグラインドし、同時に前後に激しく揺られて、牡と牝の結合部からジュグジュグという淫らな音と、圧倒的な快感フェロモンが発散される。

「ああっ、チンポッッッ！　チンポぉぉぉっっっ！　ギュッって抉って！　マ〇コをぉっっ！　くぁぁぁぁあっっっ！　おかひくなっひゃうっっっ……牝犬マ〇コがグズグズになっひゃうぅぅぅっっっ！」

先日、貧民街で叩き込まれた淫語を連呼し、快感に悦び泣き叫ぶ姿はとても麗しい姫君のものとは思えない。

中年侍と若い女の激しすぎる性交に、木製の犬舎が軋み、深夜の山中に堕ちた牝犬の快楽の咆哮がこだまする。

（お、犯されておるっっ！　家臣たちに……姫であるわたしが……牝犬の格好で貫かれておるぅぅっっ！　恥ずかしいいっっ！　でもイイっっっ！　好きなだけ犯すがよい……姫のマ〇コじゃぞっっ！　ああっ、もっとっ！　もっと突きまくるのじゃぁぁっっ！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/